東北大学機関リポジトリ
TOUR
Tohoku University Repository

# Cultural Differences in Psychosocial Adjustments of Young Adolescents : A Cross-Cultural Study of Myanmar and Japan



| | |
|---|---|
| 著者 | SOE SHWE |
| 号 | 4 |
| 学位授与番号 | 64 |
| URL | http://hdl.handle.net/10097/36910 |

ソー　シュエ
SOE　SHWE

学位の種類　博　士（国際文化）

学位記番号　国博　第　64　号

学位授与年月日　平成18年3月24日

学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻　東北大学大学院国際文化研究科（博士課程後期3年の課程）
国際文化言語論専攻

学位論文題目　Cultural Differences in Psychosocial Adjustments of Young Adolescents: A Cross-Cultural Study of Myanmar and Japan（青少年の心理社会的順応における文化的相違－ミャンマーと日本の比較文化研究－）

論文審査委員　（主査）
教　授　山　下　博　司　　教　授　田　中　継　根
助教授　佐　藤　雪　野
教　授　宮　本　正　夫
教　授　本　郷　一　夫（教育学研究科）

# 論文内容の要旨

## 序

本研究では、ミャンマーと日本の間の青少年の心理社会順応における文化的相違を調査した。本研究の目的は：（1）青少年の心理社会的順応における文化的相違を調べること、（2）青少年の心理社会的順応に性別と年齢の影響を調べること、および（3）青少年の心理社会的結果のプレディクターを調べることにある。本研究は青少年に関する六つの重要な順応的問題に焦点を合わせる。それらは、（1）家族との関係、（2）社会的順応、（3）感情的順応、（4）外面化問題、（5）教育的順応、（6）自己と生活の価値観、である。本研究では、青少年と彼らの家族における三つの家族要因：（1）家族との葛藤、（2）家族との好意的な関係、（3）家族に対する否定的な態度、に関して調べた。社会的順応では、青少年と彼らの仲間に関して、三つの要因：（1）協調、（2）仲間と好意的な関係、（3）社会葛藤、を調査した。本研究ではまた、青少年における主要な感情

的順応問題として、感情の三つの類型：（1）不安、（2）感情性、（3）否定的な感情、について調査した。外面化問題に関して、本研究では、青少年が社会環境で直面する二つの重要な問題行動である：（1）薬物使用（喫煙、飲酒）、（2）非行行動、を調査した。教育順応とは四つの要因を含む。それらは、（1）試験への不安、（2）アカデミック・パーフォーマンス（学業成績）、（3）学習上の困難、（4）スクール・インタレスト（学校への興味）、である。これらにつき、教育順応の結果として調査した。思春期における自己と生活の価値観については、本研究は三つの要因：（1）自己価値観、（2）生活に対する好意的な態度、（3）生活の満足感、に焦点を絞った。

青少年の心理社会的順応を査定するため、論者は、92の項目から成る「若者の心理社会的な順応基準」をかつて開発している。本研究では、調査対象を、ミャンマーにおいては首都およびその他の2市にある3つの公立高校から中高生500名（男子229名、女子271名）、日本では、宮城県の仙台市と若柳町（現栗原市）にある4つの学校（中学校2、高校2）から中高生500名（男子182、女子318）とした。調査対象はいずれも12歳から18歳にわたり、平均年齢は15歳である。サンプルには、男子（41.1%）と女子（58.9%）、または、中学生（36%）と高校生（64%）が入っている。本研究では、参加者を年齢によって3グループに分けた。初期青年期グループは224名（ミャンマー＝80、日本＝144）で12歳から13歳、中期青年期グループは572名（ミャンマー＝324、日本＝248）で14歳から15歳、後期青年期グループは234名（ミャンマー＝96、日本＝138）で16歳から18歳である。本研究は二つの段階、すなわち（1）探索的な因子分析、（2）確認的な因子分析、に分けて因子分析を行った。

## 考察

### （1）青少年の心理社会的な順応における文化的相違

調査結果から、両方の国の青少年たちが、生活に対する好意的な態度に最高の点を示し、薬物使用に一番低い点を示していることがわかった。加えて、両方の青少年たちは家族との好意的な関係と仲間集団の好意的な関係にも高い点を示した。予想されたように、本研究は、ミャンマーと日本の青少年の間に心理社会的順応における大きな文化的な相違を明らかにした。ミャンマーの青少年は、日本の青少年に比べ、家族との好意的な関係、協調、仲間集団の好意的な関係、感情性、試験への不安、アカデミック・パーフォーマンス、スクール・インタレスト、非行行動、自己価値観、生活に対する好意的な態度と生活の満足感の度合いが高い。一方日本の青少年たちは、ミャンマーの青少年たちよりも家族との葛藤、家族に対する否定的な態度、社会葛藤、不安、薬物使用と学習上の困難の度合いが高いことが判明した。家族関係における通文化的な研究において、Matsumoto（2002）は、日本人が韓国人、ロシア人、アメリカ人に比べて家族間の関係で最も集合性が低いことを見出した。Khin Lat（1979）は、ミャンマーの若者が日本の若者より家族順応について多

くの問題があることを明らかにしている。しかしながら本研究は、ミャンマーの若者より日本の若者の方が家族間の葛藤の度合い高いことを明らかにするものとなった。この結果は、心理的な文化変容の影響が、若者の間に態度、価値観、所信や行動に変化をもたらすことがあり得ることを示すものかもしれない。日本の親たちは自律、適性、独立、個人的自由といった個人主義的な価値観を尊重するようになっており、日本では伝統的な規範への抵抗から伝統的な大家族世帯は減少し、離婚の割合が増えつつある（Yamada, 2004）。

日本の青年よりも、ミャンマーの青少年のほうが、家族間の関係がより好意的なことが明らかになった。この結果は、ミャンマーの青少年の方が日本の青少年よりも家族関係に高い価値を置いていること示している。ミャンマー文化では、強い宗教的了解、伝統的前提事項、親と子供の間にある五つの社会的義務が家族の絆を強める働きをしていると考えることができる（Khin Myint, 2003; Khin Myo Chit, 1995; Mi Mi Khaing, 1962; Shway Yoe, 1963）。ミャンマーの文化では、例えば、両親に対する五つの社会的義務として：（1）子供に誤った行為をさせない、（2）子供に正しい行いをするよう指導する、（3）子供を教育する、（4）すべての財産・遺産を譲る、（5）成人した息子あるいは娘にふさわしい結婚相手をみつける、がある。さらに、子供の五つの社会的義務としては：（1）両親の老後の面倒をみる、（2）家族の問題を監督する、（3）両親の財産を受け継ぐのにふさわしい行動する、（4）亡くなった両親の死後の幸福を願う宗教的儀式をとりおこなう、（5）ナショナル・アイデンティティをまもる、がある。ミャンマーの若者は、伝統的に家族の結束と家族メンバー間のまとまりを尊重し、兄弟喧嘩を避け、家族メンバー間の好意的な関係に信頼を置く。何人かの研究者たち（Khin Myint, 2003; Khin Myo Chit, 1995; Shway Yoe, 1963）は、ミャンマーの家族間関係は多分にポジティブなものであり、また宗教的および文化的な活動に強く影響されていると記している。ミャンマーでは、家族の価値は他の社会的な事項に比べ最も重要な要因であり、個人と家族は一つであって、切り離された概念として捉えられてはいない。

予想されたとおり、ミャンマーの青少年は、社会的順応という点で、日本の若者よりも協調性や仲間集団との好意的な関係を重視する度合いが高いことがわかった。社会的調和の概念と集団的規範はミャンマー文化における社会生活の主要な様相である。ミャンマーの人々は社会的調和や協調性と仲間集団との好意的な関係を、人生を成功裏に乗り切るために必要なものとして重要視する。ミャンマーの親や教師たちは、子どもたちに友だちとの良い関係を築くことを奨励する。それゆえ、仲間集団と友好的で調和的な関係を築くということは、ミャンマーの青少年の規範的な社会的行動なのである。伝統的な日本の文化においては、調和的な関係は相互依存関係（interdependent relationship）の重要な構成要素である。日本の親たちは、仲間集団との関係を大切な社会的な学習の場と考えていたので、子供たちに行動統制（behavioral control）を用いて協調性を発揮することを奨励している（Rothbaum et al., 2000）。しかし、日本の青少年が西洋の青少年よりも仲間

関係が弱く、たとえばオランダの青少年よりも仲間関係の質が低いということを示す先行研究もある（Dekovic et al., 2002）。このことは日本の近代化と工業化、および文化変容の影響とつながりがある可能性がある。

本研究の結果は、感情的な順応や外面化問題そして教育的順応に関して大きな文化的相違があることを示している。この結果は、ミャンマーの青少年が、日本の青少年より感受性、試験に対する不安、アカデミック・パーフォーマンス、スクール・インタレスト、非行行動などの度合いが高いことを示している。それに対し日本の青少年は、不安、学業上の困難、薬物使用の度合いが高いことが示されている。研究者たち（Kitayama et al., 2000; Markus & Kitayama, 1991; Matsumoto, 1994; Schimmack et al., 2002）は、感情面についての調査結果は文化によって顕著に異なると述べている。本研究は、ミャンマーの青少年は情緒的感受性を経験しがちであるが、日本の青少年たちは不安を経験することが多いということについて、洞察を与えるものとなっている。教育的な順応という点では、ミャンマーの青少年は日本の青少年よりも試験への不安やアカデミック・パーフォーマンスについて高いポイントを示した。この結果は、ミャンマーの学校教育が子どもの教育結果の評価において競争的なストラテジーを用いているということによって説明しうるものであろう。

予想通り、本研究の結果は両方の国の間で自己・価値観と生活の価値観についての大きな相違を示している。ミャンマーの青少年たちは日本の青少年たちよりも高い自己価値観を持っている。この結果は伝統的な文化や宗教を調べることで説明されるであろう。基本的なミャンマー人の生活は仏教に根付いている。仏教は社会と家族に対する重要な規範を形作っている（Khin Myint, 2003; Mi Mi Khaing, 1962; Shway Yoe, 1963）。仏教はミャンマーの親たちが子供を社会化させる上で重要な役割を果たしている（Khin Myint, 2003）。子供たちは学校で宗教的な信条、社会的な規範、道徳的な価値観などを学習する。ミャンマー社会は、世俗にある仏教信者が日常生活で守るべき五つの基本的な道徳を基礎としている。これらは仏教に由来するものである。この五つの指針はミャンマーの人々の生活に強く影響し、道徳上の重要な基準となっている（Khin Myint, 1995）。現在の日本では、特に若者の中で、伝統文化的な想定や規範と宗教的な信条は徐々に弱体化しているものと思われる。社会の変化とともに、日本の若者は文化変容の影響を受けている。前に述べた通り、心理的な文化変容は、個人の所信、態度、習慣、自己評価と社会行動に強い影響を及ぼしている。いくつの先行研究では、日本人は欧米人よりも自己高揚（self-enhancement）や自信（self-confidence）のレベルを低く示し（Heine & Lehman, 1999; Kobayashi & Brown, 2003）、日本人はカナダ人（Canadians）よりも肯定的な自己評価を低く示し、さらに、日本人は自己批判（self-criticism）の考え方を維持しようとする傾向が強い（Hiene et al., 2001）とされている。多くの研究で、日本の文化で自己批判が支配的な概念であると述べられている（see Hiene & Lehaman,

1999; Heine et al., 2001; Kitayama et al., 1997; Markus & Kitayama, 1991)。

生活の価値観について、ミャンマーの青少年は、日本の青少年よりも生活に対する好意的な態度に高い点を示している。これは、政治的、教育的、経済的な制度などを含む近年のミャンマーの変化と関連している可能性がある。この変化によって、現代の若者たちは以前の若者に比べて、より広い進路選択の機会を得るようになっている。もうひとつの可能性は、発展途上国の若者たちは先進国の若者よりも生活上の障害や困難に直面しているので、生活で多くの期待や願望を抱えているということである。また、Dekovic et al. (2002) の研究結果のように、日本の青少年がオランダの青少年より幸福の度合いが低いことを指摘するものもある。

思春期における生活の満足感に著しい文化的な相違があることは明らかである。先行研究の結果は、集団主義的な文化の人々は個人主義的な文化の人々よりも生活の満足感を顕著に低く示し、また、集団主義的な文化では、生活の満足感は文化的な規範や価値観と強く関連している。それに対し個人主義的な文化では、生活の満足感は個人的な自由 (individual freedom) や自由な自己 (independent self) と関係し、さらに、貧しい国においては生活の満足感は富裕な国に比べて金銭的な充足に強く影響されていることをも先行研究は示唆している (see Diener & Diener, 1995; Oishi et al., 1999; Suh et al., 1998)。論者は、日本の青少年たちがミャンマーの青少年たちよりも生活の満足感に高い点を示すと仮定したが、生活の満足感についての日本の青少年の結果は、ミャンマーの青少年の結果と著しい相違を表さなかった。ミャンマーと日本を比較するならば、政治的、教育的、経済的システムなどの多くの相違がある。日本は先進国の一つであり、教育を受けた人々から成る社会である。その結果、多くの日本の家族はミャンマーの家族よりも富裕で、日本の若者はミャンマーの若者より多くの就業機会をもち、自由の幅も広い。したがって、日本の若者の方がミャンマーの若者よりも家庭の満足感が高いと思われる。しかし、これらの結果は、人々が自分たちの人生に満足しているさまを反映したものであるとは言えないであろう。集団主義文化の間では、文化的な規範と価値観が、生活の満足感において非常に重要な要因となることを本研究はよく示している。

（2）青少年の心理社会的な順応における性別と年齢の相違

本研究は、思春期における青少年の心理社会的順応の問題にジェンダーが重要な役割を果たしていることを示している。Peiser & Heaven (1996) によると、女性は男性よりも家族との関係に愛着をもち、かつ好意的な傾向があるという。本研究では、仮定した通りに、両方の国において女性は男性よりも家族との好意的な関係により高い価値を置くことを明らかにした。ミャンマーの社会では、女子は男子よりも家族関係を重視する。一部の研究者たちは、ミャンマー社会において女性は男性よりも家族関係に愛着を感じ好意的な態度を示すと指摘している (Khin Myo Chit,

1995; Mi Mi Khaing, 1975; Shway Yoe, 1963)。Someya et al.（2000）らは、日本の子育ては子どもの出生順と性別に影響されていると主張している。彼らは、年齢が上の男子は子育てに拒絶感をもつのに対し、女子は子育てを暖かいものと受け取るという。さらに、日本の父親は兄を兄弟姉妹にとって理想的かつ模範的であることを強く望むのに対し、母親のほうは女子に対して優しく女らしくなるようし向けると報告している。

社会的順応に関して言えば、ミャンマーの男子青少年は女子よりも協調の度合いが高いが、日本の男子青少年は、女子よりも協調と仲間との好意的関係の度合いが低いことが明らかになった。本研究の結果は、ミャンマーのサンプルにおいて、男子と女子の間に、社会的葛藤、生活に対する好意的態度、生活の満足感などの要因では、著しい相違を示さなかった。しかし、日本のサンプルでは、女子は男子よりも社会葛藤と生活の満足感の度合いが高いが、男子は生活に対する好意的態度に女子よりも高い点を示した。仮定した通り、両方の国の女子は男子よりも感受性と否定的感情を持つ傾向が強い。この結果は、青少年女子が男子よりも憂鬱、不安、対人的感受性の度合いが高いとする先行研究の結果と一致する（Bartle-Haring et al., 2002; Bolognini et al., 1996; Kim, 2003; Ohannessian et al., 1999)。結果として本研究は、青少年の感情的順応に関するジェンダーの相違についての理解を強化するものとなっている。ジェンダーは、不安よりも感受性と否定的な感情に著しい影響を及ぼしている。本研究の結果は、青少年男子のほうが、同じく女子よりも、飲酒、喫煙、麻薬の使用などの薬物使用や非行が多いということを示した。多くの先行研究では、思春期において男子は女子よりも外面化問題（薬物使用や非行）が多いことを証明している（Aunola et al., 2000; Criss et al., 2002; Kim et al., 1999; Pettit et al., 2001)。

さらに、両方の国の青少年女子は青少年男子よりも試験への不安が大きく、アカデミック・パーフォーマンスの度合いが高いことが明らかになった。スクール・インタレストにおいては、ミャンマーの青少年男子は女子よりも大きなスクール・インタレストを示したが、日本の青少年女子は男子よりも大きなスクール・インタレストを示した。自己価値観と生活価値観の点においては、仮定通りに両方の国の女子は男子よりも高い自己価値観の度合いを示した。ミャンマー社会では、多くの人々が、女性は男性より高いモラルを持ちそれを守らなければならないと信じている。ミャンマー社会は、自己価値観の保持について、男性と女性の間に明確な区別をしている。西欧における研究は、自己概念、特に自尊心においてジェンダーの役割に関する広い理解をもたらした。いくつかの研究では、女性は男性よりも自尊心の度合いが低いことが示されている（Bolognini et al., 1996; Harper & Marshall, 1991; Ohannessian et al., 1999; Rosenberg, et al., 1965)。自尊心と自己価値観におけるジェンダーの相違をよりよく理解したいならば、青少年男子と女子の自尊心あるいは自己価値観に関係する要因を特定することが肝要である。さらに、文化は一つの重要な要因であり、自尊心と自己価値観に関係する要因に焦点を絞って考察する際には、文化が主要な根源の一つと見

なされるべきであろう。

本研究は年齢のレベルが青少年の心理社会的な順応における相違とどうのように関連しているかについての広い理解に寄与するものである。研究結果によると、ミャンマーでは、年上の青少年たちは年下の青少年よりも彼らの家族との関係により肯定的であるが、日本では、初期思春期の青少年たちは年上の青少年たちより家族との好意的な関係の度合いが高いことが明らかになった。日本のデータは年齢グループの間で家族との葛藤について著しい相違があることを示し、初期思春期と後期思春期の青少年たちは中期思春期の青少年たちよりも家族との問題を多く抱えていることを示している。しかし、ミャンマーのデータでは、この変数については年齢グループの間の統計的な相違はほとんど見られなかった。Robin & Foster（1989）も、家族との境界が重要な役割を担っており、これは、子供の年齢と関連していると仮定している。予想の通り、本研究の結果では、感情的な順応において年齢グループの間の著しい相違が示された。ミャンマーのサンプルにおいては、初期思春期の青少年たちは他の青少年たち（中期思春期と後期思春期）よりも大きな情緒的感受性を持っているが、後期思春期の青少年たちは他の青少年たち（初期思春期と中期思春期）より多くの否定的な感情を示した。日本のサンプルにおいては、後期思春期の青少年たちは初期思春期と中期思春期の青少年たちより不安に対する問題を多く示した。予想した通り、外面化問題において年齢の影響が大きいことが判明した。後期思春期の青少年たちは年下の青少年よりも薬物使用（substance use）（例えば、飲酒、喫煙と麻薬使用）において多くの問題を抱えている。非行に関しては、初期思春期の青少年たちが年上の青少年たちよりも多くの問題を示した。この結果は、後期思春期において青少年が飲酒、喫煙、麻薬の使用により多く関わる傾向があるのに対し、初期思春期の青少年は非行行動に走りやすいとする諸研究の見方と一致している。

（3）青少年の外面化問題、教育的な結果と生活の価値観のプレディクター

本研究では、思春期における外面化問題、教育的な結果、生活の価値観のプレディクターを調べた。その結果によれば、青少年と彼らの家族の間にある関係は、青少年の外面化問題に重要な影響を及ぼしている。たとえば、本研究では、家族との葛藤や家族に対する否定的態度が青少年の薬物使用と非行行動の強いプレディクターであることが示された。多くの研究は、子育て行動、子育ての仕方と種類が思春期の外面化問題の非常に強いプレディクターであることを示している（Buist et al., 2004; Galambos et al., 2003; kim, 1999; Pettit et al., 2001）。青少年の教育的な成果のプレディクターに関して言えば、家族との好意的な関係が青少年のアカデミック・パーフォーマンスの最大のプレディクターである。さらに、この変数は、試験への不安とスクール・インタレストのプレディクターでもあるのである。家族との葛藤と家族に対する否定的な態度は、学習上の困難にポジティブな影響を与えている。仮定した通り、本研究は青少年の教育的な成果に対する仲間関係

の強い影響を見出した。特に、仲間と好意的な関係は試験への不安、アカデミック・パーフォーマンス、スクール・インタレストにポジティブな影響をもったが、社会的葛藤は学習上の困難の強いプレディクターであることがわかった。結果として、好意的な仲間関係の質が、学業上の達成度、スクール・パーフォーマンス、スクール非行を含む青少年の好意的ないし否定的教育成果の基本的要因と考えられる。いくつかの先行研究（e.g., Dorbusch et al., 1987; Lamborn et al., 1989; Parker & Asher, 1987; Steinberg et al., 1994）によると、子育ての仕方や仲間関係の質は、学業上の達成度とスクール・パーフォーマンスの大きなプレディクターである。

本研究は、家族や仲間との良好な関係や自己価値観が、思春期における生活の価値観にどれだけ強いインパクトを与えているかについて、より深い洞察を与えるものである。たとえば、家族との好意的関係や仲間集団との効果的関係が、思春期の生活に対する好意的な態度にポジティブな影響を与えているが、家族に対する否定的な態度と社会的葛藤は青少年の生活に対する好意的な態度にネガティヴな影響を及ぼしている。このように、家族や仲間の好意的な関係の質は、青少年が彼らの生活をポジティブに見えるために必要なものである。もう一つの重要な発見は、仲間集団との好意的な関係や自己価値観が思春期における生活の満足感の非常に強いプレディクターとなっていることである。多くの研究において、家族との関係、仲間関係の質、自尊心、自覚的幸福感（SWB）との間に強い連関があることを見出している（e.g., Benet-Martinez & Karakitapoglu-Aygun, 2003; Diener & Diener, 1995; Oishi et al., 1999; Suh et al., 1998）。Benet-Martinez & Karakitapoglu-Aygun（2003）は、個人主義的文化においては、友人との満足のいく関係が生活の満足感の強いプレディクターとなっているが、それに対し、集団主義的文化では家族との良好な関係が生活の満足感の重要なプレディクターとなっていることを示した。これらの先行研究は、自尊心を生活の満足感の強いプレディクターとして強調している。本研究はまた、仲間と好意的な関係と自己価値観が青少年の生活の満足感の重要なプレディクターであることをも明らかにした。

## 結論

要約すれば、本研究は文化が青少年の心理社会的な結果に対し重要な役割担っていることについて深い洞察を与えるものである。本研究の結果は、青少年の心理社会的な発達に関する文化的な相違を、集団主義的な文化と個人主義的な文化の間において調べるだけでなく、集団主義的な文化間についても調べることが重要であることを指摘している。ミャンマーと日本の青少年の間にある著しい相違は、親の社会化（socialization）のやり方、文化的な規範や価値観と関係している可能性がある。これを文化的な価値観と社会の質に基づいて説明することができる。ミャンマーは伝統文化の国である。従って、ミャンマーでは、伝統・文化的な規範は日常生活と家族との価値観に強く影響している。このことからして、ミャンマーの青少年は、家族メンバーとの関係において、日本

の青少年よりも強い調和、結束、一致をもち、文化的な規範にも大きな価値をおいている。事実ミャンマーの青少年は、家族との関係において葛藤状況を作るより好意的な関係を維持しようと努める。それに対し、日本は近代化の進んだ社会である。日本では、伝統文化的な価値観は衰退し、それとともに、家族メンバーをつないできた家族的な価値観も弱体化している。こうした状況は、家族メンバー内の関係や親子間の関係に葛藤を生じる要因になっている。今一つのありうる事実は、現代的な社会では、伝統的な文化をもつ社会に比べ、家族との関係や親子関係により多くの葛藤を引き起こしているということである。

さらに説明を加えれば、両国の青少年たちは家族との好意的な関係により大きな価値をおき、生活と自己価値観についても好意的な考え方を示す傾向をもっている。比較文化的観点から見れば、愛情と家族の情愛の絆に照らして、好意的な家族関係はすべての文化に共通のものである。しかし文化を、家族メンバーが家族の統合また崩壊についてどうのように考えているかを理解しようとする際の重要な要因であると考えなければならない。たしかに、本研究のデータは、西洋の研究結果と比較したとき、家族単位ないし家族構成のパタンは文化的に形作られることを示唆している。他の文化的な観点から見れば、集団主義的な文化（たとえばアジア）の人々は個人主義的な文化の人々と比べて、家族価値観にポジティブな考え方を抱く傾向がある。従って、文化は家族単位や家族構成に中心的な役割を果たしているものと考えられる。本研究は、ジェンダーと年齢の違いのもつ役割を青少年の心理社会的適応問題の中心的焦点と考えることが必要であるとする普遍的な事実に、より広い理解を提供するものでもある。本研究から得られた重要なことは、家族や仲間との好意的関係こそが、青少年の示す諸状態の最大のプレディクターと見なされるべきであるということである。

# 論文審査結果の要旨

本論文は、文化が青少年の心理現象にいかなる影響を与えているかを調べるため、日本とミャンマーの生徒を対象に比較文化心理学的手法を用いて調査・研究したものである。この研究は、これまで比較研究されることのきわめて少なかった日本とミャンマーについての文化心理学的なデータと分析とを提示するもので、それだけでも貴重な意義を有するものといえる。調査対象として双方それぞれ500人を選んで質問票による調査を行い、統計学的処理を施して文化間の違いに起因すると考えられる諸現象について論述している。サンプルの代表性という点において若干の疑義は残るものの、各500人というサンプル数は統計学的な分析に耐える人数を確保しているということができる。

論文では、青少年の心理社会的順応における文化的相違や青少年の心理社会的順応における性別

と年齢の相違等の問題に着目しつつ、統計処理の方法を用いて青年と家族・兄弟・仲間などとの関係を丹念に分析している。この作業を通じて両国の青少年の心理学的な傾向の違いを指摘し、それらに働く文化の違いに起因するであろう諸因子について考察を加えている。論文全体にわたって両者の「相違」を強調する姿勢が顕著で、「類似」についての考察が十分でない恨みがあること、得られた数値が低い場合の処理や解釈の仕方および議論の有効性に疑問が残ることなど、問題点が全く無しとはしないが、文化的状況や伝統のあり方の違いが青少年の心理の形成・発達に異なる作用を及ぼしていることを示す研究成果として貴重な学術的貢献を果たしている。

さらに本論文は、近代化・産業化の度合いを異にするアジアの二つの国々を文化学的かつ心理学的に比較考察することで、固有の伝統や民族文化が情操や人格の形成に果たす役割の重大さを確認するとともに、今日の日本の家族がかかえる様々な問題に対処するにあたっての建設的な示唆を含むものともなっている。

このように本研究は、総合的な観点から、博士論文として不足ない水準を達成しているものと見なすことができ、候補者が自立して研究を行うに足る高度な研究能力と学識とを示している。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。